

ウィトゲンシュタインの「不完全な像」 ——『草稿』における単純性をめぐる考察と写像理論——

浅野将秀 (Asano Masahide)
首都大学東京大学院人文科学研究科

よく知られているように、『論理哲学論考』（以下『論考』，TLP）においてウィトゲンシュタインは言語の本性をその像的性格に見出し、いわゆる「写像理論」を展開する。そこにおいて、言語がもつ像的性格は、「要素命題」とそれが表現する「事態」の間に成り立つ「写像関係」（ある種の同型性）からボトム・アップ式に説明される。しかし、このような説明は、要素命題が既に「完全な分析」によって与えられるという、強い仮定の下でなされるものである。それゆえ、このような仕方での説明だけでは、我々がもつばら用いる言語がもつ像的性格はこの「完全な分析」の想定の下ではじめて説明されるかのように思われ、そのままでは写像理論それ自体もまたいわば理想的ないし静的なものであるかのような印象をうける。

しかしここで『草稿 1914-1916』（以下『草稿』，NB）に目を向けると、事情はそのようでないことがすぐにわかる。『草稿』における一連の考察からは、ウィトゲンシュタインがはじめから『論考』（の一側面）にみられるような、理想的ないし極度に還元主義的な考えをもっていたわけではなく、より現実的な、つまり我々の実際の言語使用に定位した問題意識をもっていたことがうかがえる。とりわけ彼は「単純な対象／名」をめぐる考察を通じて、我々が日常用いているような未分析な命題（つまり、将来の分析によりその構造が詳細化される余地を残す、という意味で「不完全」であるような命題）がもつ像的性格や、命題の分析というプロセスがどのような仕方で行くのかといったことについて、かなり力を入れて考察している。そこで、以上のような事情をふまえた上で写像理論を見直すことができれば、初期ウィトゲンシュタインの哲学の内にも十分にダイナミックな言語観を見出すことができるだろう、というのが発表者の見通しである。

以上から、本発表では、まず「単純な対象」をめぐる『草稿』の考察の中でウィトゲンシュタインが我々の言語（および言語を用いた我々の活動）がもつどのような側面に関心をもち、またそれについてどのような問題意識をもっていたのかについて検討する。次いで、その中に現れる「命題はある事実の不完全な像でありうるものの、像としてはつねにひとつの完全な像である」（NB, 1915/06/16, TLP, 5.156）という（一見するとパラドキシカルな）一節に見られる、「不完全な像」という概念に焦点を当て、それがどのようなものか（どのような点で「不完全」であり、またどのような点で「完全」でもあるのか）、そもそもそれが「単純な対象」の問題、とくに、命題の分析にかかわる問題とどのように関係するのか、といったことを考察し、ウィトゲンシュタインの写像理論によりよいパーспекティブを与えることを試みることにしたい。